
『今、ヒトは遥かなる高みへのぼる』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『今、ヒトは遥かなる高みへのぼる』

【Nコード】

N7130N

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

これは、自らの名を歴史に残そうとした科学者と、現実を冷静に直視し、時代の流れを冷静に受け止めようとした大学教授と、あくまでも自分の良心に従い、それに抗おうとした魔人の物語である。

第一章 極秘計画

これは、自らの名を歴史に残そうとした科学者と、現実を冷静に直視し、時代の流れを冷静に受け止めようとした大学教授と、あくまでも自分の良心に従い、それに抗おうとした魔人の物語である。

ひとりの黒人が机を前にして坐っている。男はふと、傍に置かれた電話を取った。

「例の計画だが、どうなっている？」

「大統領、その件でしたら、博士に直接お聞きになった方が早いかと」

男はアメリカ初の黒人大統領だった。

「わかった。シュンスケ・タナカ博士につなげ」

博士に電話がつながった。

「博士、計画の進行状況を報告してくれ」

「これはこれは大統領自らわざわざ電話を下さるとは、恐縮の至りです！ 計画は着々と進んでおります。何の御心配もありません」

「そうか。それなら安心だな」

大統領は電話を切った。

ニガーの癖して、何が大統領だ！ 笑わせるな！ ニガー！ ニガー！ ニガー！

博士は毒ついていた。博士は黒人が大嫌いだった。ありていにいえば、人種差別主義者であった。

あんな奴が大統領になるなんて、この国は間違っている。世界は道を誤ろうとしているのだ。

それを正せるのは、この私しかない！ と博士は確信していた。もはやそれは、信仰と言えるものであった。

あんなやつことはもうどうでもいい。肝心要は、計画を進め、アレを完成させること。アレさえ出来れば、世界は新たな局面に向かうのだ。そして、私は世界を変えた天才科学者として、歴史にその名を刻むこととなるのだ。

ヒヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ！ 想像しただけで、自然とよだれが垂れてくる博士だった。

「ヒヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘヘ！ はないだろう、博士」

突然、博士の耳に「あの方」の声がした。

も、申し訳ございません、い、イエス様と博士は心の中で返事をした。

「下品な言動は慎め。お前は私に選ばれた民。いつ何時も、それを忘れてはならぬ」

イエスは厳しい口調で命じた。

は、ははー、イエス様。博士は頭を下げた。

私は大学教授だ。私は今、アメリカの極秘計画に関与している。関与といっても、アドバイザーという立場としてだ。

あの計画が実施されれば、この世界は一変してしまうだろう。あれはヒトを根本から変革する計画なのだ。

進歩。人類は、さらなる進歩を遂げることとなるのだ。私はそれを見届ける役目をあずかったというわけだ。

しかし、計画責任者のあの日系の博士が気にかかる。彼はどうやら差別主義者のようだし、俗に言うマッドサイエンティストのように見受けられたからだ。あんな男が責任者でいいのだろうか。私は大統領にそれとなく、何度も彼を外すように進言したが、なぜ受け入れられなかった。大統領は何を考えているのだろう。

私はできることはやった。あとは成り行きに任せるしかない。私は運命だとか、そんなものは信じない。神も信じない。私は宗教とは無縁の人間だ。

「俺に用だつて」

魔人岩崎文太はサタンに向かつて喋った。魔王サタン。サタンは今、金髪で青い目をしていて、長身で大柄な白人の姿をしていた。その隣に、黒で服装をかためた男が立っている。

「おい、サタン、そいつは誰だ？」

岩崎はサタンに聞いた。

「俺か？ 俺は副王をやつてるルシファーだ。ルシファー、聞いたことあんだろ？」

「ああ、まあな」

「宜しく頼むぜ、文ちゃん」

ルシファーが馴れ馴れしく言った。

「文ちゃん？」

岩崎は突然の相性誕生に度肝を抜かれた。

「岩崎、お前にはやつてもらわねばならないことがある」

サタンが重々しく口を開いた。

「なんだよ。どうせまた悪だくみだろ」

「いや、これは人類を破滅から救う作戦なのだ」

「ほう。聞かせて見ろよ」

岩崎はサタンの目を覗き込んだ。それはどこまでも透き通った瞳だった。

第二章 前大統領との会談

田中俊介博士は日本人である。日系アメリカ人ではない。

田中が「主」の声を聞いたのは小学生の頃だった。そのとき、主イエスはこう言ったものだ。

「田中俊介、お前は選ばれた。お前が破滅へと向かうこの世界を救うのだ。私の声が聞こえることは誰にも漏らしてはならない。漏らせば、お前の身に危険が及ぶであろう」

田中はイエスのいいなりになった。同時に、歓喜した。自分が選ばれた人間だと思うと誇らしかった。

田中は一九七〇年生まれで、今年で四十歳になる。田中は大学三年生だったとき、バブル経済崩壊を目の当たりにした。

田中は強い衝撃を受けた。それまで日本人であることに誇りをもっていた田中にとって、足元が崩れ落ちたようにショックだった。

田中は日本が嫌いになった。田中が愛していたのは、経済大国としての日本だったのだ。世界一でなければ、田中は我慢できなかった。

日本。あの戦争であり得ないほど負けに負けた日本。せっかく築き上げた世界一の経済大国という地位から滑り落ちた日本。田中は、日本を見捨てる決意を固めた。

田中は留学先にアメリカを選んだ。アメリカ。冷戦終結後、唯一

の超大国となった国。戦争にも経済にも勝ち続けた国。この国こそ、自分にふさわしいと田中は考えたのだ。

それに、イエスの言葉も田中を後押しした。

「田中よ、アメリカに行くのだ。もう日本に居てもよいことはない。この国はゆるやかに、徐々に沈んでいく運命にあるのだ。もう再び浮かび上がることはないのだ。早いところ、見切りをつけるのだ」

田中はアメリカ屈指の大学院に留学した。田中はそこを次席で卒業した。首席ではないことが、田中を大いに苦しめた。

田中はその大学院の研究所の研究員となった。田中はそこで、今の計画につながる構想をもつにいたった。もつとも、イエスの助言のおかげではあったが。

「人類は滅びの道をおうとしている。もうすぐアメリカが、世界が未曾有の悲劇に見舞われる。それを阻止するのだ」

どうすればいいのかを田中は問うた。

「大統領に会え」

とイエスは言った。無理な話だと田中は思った。

「いくらなんでも、それは無理つてものだと思いますが。いえ、イエス様の御言葉に逆らうようで抵抗があるんですけども」

しかし、イエスは諦めなかった。

「私が協力すれば、お前と大統領との会談は実現する。なにしろ、私は神なのだから」

さすがの田中も信じてはいなかった。しかし、驚天動地の出来事が起こった。大統領補佐官から電話がかかってきたのだ。大統領が田中に会いたいと言うのである。田中は二つ返事で快諾した。

大統領、今となつては前大統領だが、彼はなかなかの長身であった。力強い握手を求めてきた。

田中は興奮さめやらぬままに、自らの理想を語った。しかし、大統領の顔は渋くなるばかりだった。田中は会談の行く末に不安を感じた。

それまで黙って田中の話を聞いていた大統領が、重い口を開いた。

「ミスター田中。私は神を信じてもいるし、人々の心の中に住む良心の存在も信じている」

だから何なのだ。話が見えない田中であつた。

「あなたが話したことは、神や宗教、人間の信仰心、道徳、良心といったものを冒瀆し、根本から破壊せしめるものだ。だから、私はとてもではないが、賛成できない」

イエスが即座に反応した。

「田中よ、この男は悪魔にすっかり取り込まれてしまっている。だ

からお前の話に聞く耳をもたないのだ。交渉は決裂だ。帰れ。帰るのだ」

田中は帰り際、大統領に言ってやった。

「大統領、あなたは悪魔に魅入られています。だから、私の話に魅力を感じないのです」

しかし、大統領は動じなかった。

「それはあり得ない。私は常に神の声を聞いている。神は常に私とともにある」

「田中、あの男はきっと戦争を起こすだろう」

イエスは予言した。

そして、あの事件が起きた。イエスの予言通り、大統領は戦争を起こした。やはり、イエスの言葉は正しかった。あの長身の白人は、悪魔に取りつかれていのだと、田中は確信した。何が神だ。何が宗教だ。何が道德だ、良心だ、信仰心だ。あいつがやっていることは、ただ石油目当てに人殺しをやっているだけじゃないか。そういや、あいつは大学の成績がオールCだったらしいじゃないか。あそこの大学院を次席で卒業した私とはえらい違いだ。あんな奴、大統領にするべきじゃなかったんだ。

田中は八年間、自身の理想、そして野望を封印することになって

しまった。田中は前大統領を憎むこと、甚だしかった。

第三章 人類の未来

田中は最後に前大統領と握手してから、大統領執務室を出た。

ジョージ・W・ブッシュは田中の背中を見送った。

田中がすっかり退室すると、ブッシュはひとりごちた。

「主よ、あの日本人は私が悪魔に魅入られているなどとよまいごとをぬかした。あなたが、悪魔のはずはないのに」

「だからさあ、言ってるじゃん、俺はルシファーで、魔界の副王様で、かなり高級高等な悪魔なんだって。主なんかじゃねえんだよ」

ルシファーはブッシュの態度にいら立ちを隠しきれない。

「私は敬虔なキリスト教徒です。そんな私に、悪魔の、それもルシファーの声など、聞こえるはずもない」

ブッシュはルシファーの言葉にまるで耳を貸さなかった。

「お前、何言ってるんだよ。ほんとにわけわかんねえ奴だな」

ルシファーはあきれ果てていた。

私は初めて田中俊介博士と出会った日のことを、今でも鮮明に覚えていてる。

「……教授！……教授！ お会いしたかった！
田中です！ 田中俊介です！……学を専門にしております。以後お見知りおきを」

いやにテンションが高い男だなというのが第一印象だった。

「あなたの御本、読ませて頂きました！ 大変素晴らしく、興味をそそられる個所が多かったです！ 何でも、日本での妊娠十週未満の中絶胎児の件数は、三十万件に及ぶとか！ それで、中絶胎児を一般ゴミに紛れこませて捨てた産婦人科医院もあったとか！ 教授も書かれていましたが、中絶胎児は治療に利用できるわけなんで、捨てるのはもったいないですね！ どうせ捨てるのなら、利用できる部分は利用してから、そのあとで捨てりゃいいんですよ！ そうそう、葬式で死体の顔を携帯電話のカメラで撮る輩が増えているとか！ 死体からオーラが消えたとか教授は書かれてましたよね？ まさにその通り！ 人間の死体なんて、ただの物質ですよ！ 死体に尊厳なんかありやしないんですよ！ ただのモノですよ、モノ！ 中絶胎児も然り！ これもまた、ただのモノですよ！ 人間がただのモノとして、使い捨てられる時代になった、そうでしたよね、教授！ いい時代になったもんじゃありませんか！ 面白くなってきたとは思いませんか！ モノがモノとして扱われなかった今までがそもそも間違っていたですよ！ これから、まっとうな時代が始まるんです！ そして、我々は今、時代の転換点を目の当たりにしているわけです！ 素晴らしい！ 実に素晴らしいことじゃないですか、教授！ そうは御思いになりませんか？」

この男、本当にハイテンションなんだな。ついていけないと私は感じた。

「いえ、私はただ、そういう時代になりつつある現状を淡々と受け止めているだけです」

「へー！ そうでしたか！ そういうことでしたか！ ふむふむ、なるほど！ なにはともあれ、教授とこうして仕事ができ、光栄ですよ！」

田中は握手を求めてきた。一瞬とまどったが、所詮社交辞令だと思ひ、手を差し出した。

田中は満面の笑みを浮かべ、私の手を握った。力強い握手だった。

「イエス様、あなたは素晴らしい方に引き合わせて下さいました」

ひとりになった田中は、イエスに語りかけた。

「礼には及ばぬ。当然のことをしたまでだ。あの教授はお前の良き助言者となってくれるだろう」

「感謝の極みです。言葉ありません」

田中は泣いていた。感極まったのだ。

「なんと良き心を持った人だろう、田中俊介。私はいつでもお前の

味方だ。理解者だ。このまま計画を進めるのだ。よいな」

「はっ！」

田中は深く一礼して見せた。

「おいおい、サタン様聞いてくれよ」

魔界でルシファーはサタンに愚痴をこぼしていた。

「どうした？ 何か非常事態か？」

「あいつだよ、あいつ。ブッシュ。あいつ俺がいくら悪魔だルシファーだ副王だつても、いつまでも俺を神だと思ってやがる。嫌になるぜ。あいつ、やっぱり頭悪いんじゃないかねえ。大学の成績オールCだもんね」

「むしろその方が好都合だろう」

「まあな。あいつは信仰心が篤いから、何でも俺のいいなりになるぜ。あそこまでの阿呆はなかなかいないねえ」

「よかったじゃないか」

「ああ、いいにはいいんだが、キモくてかなわねえんだよ。毎日毎日主よ主よと言われても、こっちは困るんだ」

「我慢しろ」

ルシファーはブッシュに感じた困惑をると語り続けた。

第四章 天使の会話

私はそれから何度も田中博士から自著の感想を延々と聞かされる羽目になった。

「ブルセラや援助交際を論じた所も大変面白かったです！ パンツを売って何が悪いのか！ 体を売って何が悪いのか！ 自分の体を使って商売しているだけじゃないですか！ 他者に迷惑をかけない限り、何をやってもいいのが資本主義社会・自由主義社会というものですよ！ ブルセラや援助交際を批判する連中の方がおかしい！間違っているんですよ！ 旧態依然の時代錯誤の大馬鹿野郎どもなんだ、あいつらは！ 彼女たちが自分で決めたことなんだから、いいじゃないですか！ 自己決定権を行使しただけなんですよ！ 教授が御本で書かれておられる通りです！ 援助交際なんて、大げさに騒ぐことではない、単なるレンタル業なんですよ！ 体を貸して、その代金として金を受けとる、それだけの話です！ その結果がどうなるうが、それは選択した個人の責任です！ 自己責任ですよ！」

「よく、私の本を読まれているようですね。どうもありがとうございます」

「いえいえ、とんでもない！ ブルセラ上等、援助交際上等ですよ！ 今までの道徳がおかしかったんですよ！ あれこそが新時代の新しい現象なんです！ パンツを売って恥ずかしいとか、体を売ってふじらとか、そんなのはもう通用しないんです！ そもそも、不変普遍の道徳なんてないんです！ 道徳も人それぞれだとは思いませんか？ 教授！」

「ええ、まあ、そうですね。もはや、人々すべてが共有する道德なんてものは、存在しづらくなっているでしょう。人の数だけ、道德があるのです」

「やっぱり教授はわってくれてますね！ 感動しました！ だいたい、道德なんてものは、時代の変化とともに、変わっていくものなんですよ！ それを不変だとかあらゆる時代に共通する普遍的なものだとか語る奴が出てくるから、おかしくなってくるんです！」

「まあでも、やはり少なくとも他者に迷惑をかけない、犯罪を犯さないというような、最低限の道德観念はまだ有効だと私は思いますね」

「ああ！ そうですね！ そうですとも！ しかし私は、古いものが嫌いでした！ 古臭いものが大嫌いなんです！ 保守とか右翼とか大嫌いです！ 伝統がどうのこうの聞いていると、頭がおかしくなってくる！ 伝統なんて、それがいいと思う人だけがありがたければいいじゃないか！ それを国家全体・民族全体の伝統のように言ってくるから、話がおかしくなってくるんですよ！ 伝統も色々ですよ！ あ！ これは教授の御本には書いてなかったことですね！ 脱線してしまいました！」

「いえいえ」

その日は彼の話はこれだけで終わった。助かったと私は胸をなでおろした。

光り輝く世界に、二人の存在があつた。天使ミカエルと天使ガブリエルである。

「ミカエルよ」

ガブリエルがミカエルに話しかけた。ミカエルがガブリエルの顔を眺める。

「この教授も仲間に加えるのか？」

「参院選でも主民党は敗れてしまった」

ミカエルがあくまで冷静に告げた。

ミカエルは思案し、首を横に振った。

「これ以上我々の存在を人間に知らせることはないだろう。それに、この男は、特に信仰をもっていないようだしな」
ガブリエルは頷く。

「ああ。大学教授というのは厄介な存在だ。インテリはたいてい扱いづらい」

「田中俊介は別だな」

「あれは使える。大発見だった」

「それにバラク・オバマ」

「あれも使える。インテリも無信仰と信仰と二極化しているな」

「ただ信仰をもてばいいというわけではない」

ミカエルが苦い顔をした。

「そうだな。あちら側につかれては大問題だ」

「またぞろ奴ら、我々の邪魔をするつもりだろう」

「まったく。日本の主民党勢力はほぼ壊滅させられてしまったからな。サタンめ！ 岩崎文太め！」

ガブリエルは拳を膝に叩きつけた。怒りで顔が歪んでいる。

「悪いことは続くものだな、ミカエルよ」

「しかし、これ以上続かせるわけにはいかない」

「同感だ」

「彼らをいつでも集結させるようにさせなければ」

「アメリカの民主党勢力の傑物たちを総結集させ、事に当たらせるんだな？」

ガブリエルがミカエルの顔を覗きこむ。

「そういうことだ」

第五章 進歩のための犠牲

その日も田中博士は興奮していて、非常に饒舌だった。

「一九七八年、世界で初めて体外受精がイギリスで行われた際、世界中で厳しく批判されたとか！ 人間の尊厳を侵害するだの、人が神を演じてはならないだの、下らない批判ばかりだったようですね！ しかし、試験管ベイビーの可愛らしい姿を見た途端、それらの意見はやんでしまつとか！ いったいなんのための批判だったのか！ まつたく馬鹿らしい！ 馬鹿げている！ あまりに馬鹿馬鹿しい！ これだから保守的右翼的思考の持ち主は始末に悪い！ 教授が書かれていましたけど、新技術の開発・導入時には、そういう否定的意見が発生するもので、その背景には、科学技術に対する根拠なき恐怖心だとか！ 体外受精からモンスターが生まれると信じていた輩もいたというのですから、あきれ果てるしかありませんね！ 体外受精何が悪い！ 選択肢が増えて大変けっこう！ 試験管ベイビー上等ですよ！ 精子バンクもどんどん大々的にやればよし！ 代理母増加もよい傾向かと！ クローン人間とて、禁止する明確な理由などない！ 阿多の堅い宗教右翼どもが変な信仰にかられて、ちゃんとした論理的根拠もなく、反対しているに過ぎないのです！ 遺伝子診断で受精卵を選別することも、理の当然ですよ！ 誰が病気の子供を望みますか！ 誰が理想的な外見や能力をもった子供が生まれないことを望みますか！ 受精卵も自由に選択して構わない時代に突入したのです！ 大変リベラルで素晴らしい時代ではありませんか！ そして、さらには遺伝子組換え人間の誕生！ 遺伝子を組み替えて何が悪いのか！ 病気を治し、能力を増やして、何が悪いのか！ いいことづくめじゃないですか！ 反対する連中はためにする反対連中ですよ！ 何の基盤もありやしません！ せいぜい宗教が理由でしょうに！ 臓器の売買とて、もっと国際的に国家

的に認められるべきなのです！ どうして売買が禁止されるのか、私にはわからない！ 救える命があるというのに！ 教授は可能性としてのヒトの殺害という表現が使われてましたね。………体外受精のために普通は多数の受精卵を作成する、それは一回では成功しないため、予備の受精卵が必要になるからだとか。しかし、作成された受精卵は必ずしもすべて使用されるわけではない。未使用のそれはいずれ捨てられる運命にあり、現在米国では四十万個も存在しているとか。………着床前診断でも、この方法ははなから受精卵を捨てることを前提にしている、作成された複数の受精卵の遺伝子を診断、もし重病になるものがあれば、すぐさま廃棄される。クローン人間についても、クローン胚作製には、かなり多くの卵子が必要とされ、クローン胚のためにたくさんの卵子が捨てられるとか。遺伝子操作にも多くの卵子が必要とされるとか。………いいじゃないですか！ 何かを得るためには、代償を支払わなければならぬですよ！ それがこの世界の常識つてもんじゃないですか！ 何の犠牲もなしに、能力が手に入りますか？ 健康な子供が手に入りますか？ ノーです！ ノー！ 使い捨てられる受精卵・卵子！ それが未来の状況なんですよ！」

「これまた、よく読まれてますね」

適当に相槌を打っておいた。しかし、この男のテンションには相変わらずついていけない。私の本は、この男にとって、よほどの「収穫」だったのだろう。

田中がひとりになったところで、イエスが話しかけてきた。

「田中よ。お前の言うことはすべからく正しい。人類の進歩のためには、多少の犠牲はつきものなのだ。それは仕方のないことなのだ。それは避けられない道なのだ」

「わかっておりますよ、イエス様。私はどっかの宗教馬鹿のようになつたりはしませんので、ご安心ください」

「そうか。お前はこの計画について、思い悩むことはないのだな？」

「もちろんですとも。どうして悩みましょう。私は地球人類の未来のため、人類の進歩のために、この計画に参加しているのです。悩むどころか、疑問に思ったことなど、一度もありません」

「それを聞いて安心した」

「それより、あの教授はなんですかね。いつも私が熱心に話しかけてやっているというのに、適当に相槌を打つばかり、こちらとしては、何だか肩すかしをくらった気分です。あれはなんとかならないもんなのですか？」

「放っておけ。あの男も所詮、俗人だ。神を信じぬ不心得者のことなど、忘れてしまえ」

「それもそうですね。まあでも、別に嫌いというわけではないですよ」

田中は言い訳するようにそうつけ足した。イエスからの返事はなかった。

第六章 遺伝子競争

「人は生まれながらして平等だというのが、近代基本概念である。これは、日本国憲法においても保障されている。だが、自分も含め、周りを見渡してみよう。本当にみなが平等だろうか。答えは否だ。世界には、容姿が美しい者もいればそうでない者も存在する。裕福な者がいれば、貧乏人もいる。それが現実だ。……人には個性があり、みな他人とは違う、と言う。だが、他者との差異とは、それすなわち、他者との差別に他ならないのではないだろうか。であるならば、このように言った方が現実的だ。人は生まれながらに、不平等である、と」

田中博士は私の著書の一節をその本を読んで聞かせて見せた。

「いやあ、実に的確な指摘じゃありませんかね、教授！ 教授はその後、世襲がものをいう政治の世界、政界と実業界の不可視のネットワーク、医者が生産させるしくみ、人間の「被企性」、家族はコードである、ブランド・ファミリーの行く末、「家柄主義から能力主義へ」の反動、徒競争が運動会から消える理由、能力主義と「生まれの差異」、近づいてきたヒトの遺伝子改変時代、遺伝子の「勝ち組」「負け組」？、遺伝子操作は「敗者復活戦」か？、消費者優生学の時代、と議論を進めて行かれるわけですが、どれも大変興味深いものばかりです！ 遺伝子操作、大いにけっこう！ 遺伝子操作こそが、能力の不平等を是正するものだからです！ 遺伝子操作によって、生まれの不平等も是正するのです！ 遺伝子操作反対派は生まれの不平等を維持したい守旧派に過ぎません！ 生まれつき能力が低い人々が、遺伝子操作によってそれを高めたいと願うのは、極めて自然な方向じゃないでしょうか！ 敗者復活戦、いいじゃないですか！ 遺伝子強者と遺伝子弱者の競争が始まる？ それもい

いじゃありませんか！ あくなき競争こそが資本主義の本質と言えるのではありませんかね！ 何代にもわたる不断の遺伝子改変競争！ 素晴らしい！ そして到来する消費者優生学の時代！ 優秀な遺伝子ばかりが望んで選ばれ、それ以外はモノとして廃棄される！ 優秀な遺伝子だけの均一的な社会！ うん！ いい！ 実にいい！ なんと素晴らしいのだろうか！ 教授も私の意見に賛同されますよね？」

「私はただ状況を分析して見ただけですよ。ヒトのモノ化は回避できることができない、目下進行中の現実です。私はそれから逃げずに、私なりに立ち向かったつもりでいます。この計画にアドバイザーとして参加しているのも、それが理由です」

「ふむ。そうでしたか。それはそれは、なかなか殊勝な心がけですね」

博士は真剣な表情で何度も頷いていた。

「ところで、教授は神を信じますか？ 天使を信じますか？」

この男は突拍子もなく、突然何を言い出すのだろう。しかし私は動じなかった。

「私はリベラリストではありますが、特定の宗教の信者ではありません。霊的なものは信じません」

きっぱりと言った。博士は残念そうな顔をした。

「そう、ですか。そうですね。なるほど」

またも頷きが始まっていた。

ひとりになった田中はイエスに言った。

「主よ、どうして教授はあれほど頭脳明晰でありながら、神や天使の存在を否定されるのでしょうか？ どうして信仰をもたないのでしょうか？」

イエスは答えた。

「それはむしろ、彼が頭がよすぎるからではないだろうか」

「頭が良すぎて、信仰を持てない？ そんなことがあるのですかね？」

田中は首をかしげた。

「ありえるのだ、田中よ」

「主よ、彼を説得してはもらえないでしょうか？ 彼ならきっと、我々の素晴らしい仲間になれるはずです」

イエスから返答はしばし遅れた。

「……それはできない相談だ」

「どうしてでしょうか？」

「彼は選んではいけない人種だからだ。これは宿命だ。これは運命だ」

「宿命。運命。．．．それは、変えられぬものですか？」

田中はなおも食い下がった。

「変えられぬ。この私にもな」

「そうですか。それならば、彼のことはあきらめましょう」

田中はやっと引き下がった。

第七章 人間の尊厳を超えて

「いよいよ教授の御本の話も、最後の方に近付いてきてしまいました。しかし、進めさせてもらいますよ」

博士はそう切り出すと、また私の本の話をしだした。

「ヒトがモノ化すること、つまりはモノ・サピエンスに対して、アメリカの右派とヨーロッパの左派が反対している。……現代のバイオテクノロジーは、『遺伝子操作』により、人間の本性を変えてしまい、『人間』は『ポスト・ヒューマン』へと種を変化させる。これは、『人為的進化』とされ、アメリカ保守派のフランシス・フクヤマはそれを『人間の尊厳』に反すると判断、規制するべきだと主張した。……ヨーロッパの革新的左翼・ハーバマスは人間の遺伝子操作は『人間の道具化』であって、『人間の品種改良』であると主張した。……フクヤマとハーバマスは政治的立場こそ違い、バイオテクノロジーに対する態度では、二人は同じ立場に立っている。すなわち、彼らにとって、『人間の本質』を変更し、『人間を道具化』するために、『人間の尊厳』に反しているというわけである。だが、この反対意見に説得力はあるのだろうか。この人間の尊厳という概念はかなり曖昧で、何を意味しているか、ほとんど不明である。……すなわち、先進テクノロジーに対して重要なことは、発展を阻止することではなくて、費用・安全性・有効性の確保である。『人間の尊厳』に訴えて遺伝子操作に反対することは、望ましい選択ではないし、現実としても不可能なことなのである。考えても見て欲しい。個々人の欲望を考慮すれば、『より優秀な子供』を求めるのは、親の常だからである。親であれば普通は子供に可能な限りのよい教育を施し、能力を高めて、よい学校やよい会社に行かせたいと願うことだろう。受精卵の段階

で安価で安全に遺伝子操作が可能であれば、多くの親がこの技術を選択するようになるであろう。……現代資本主義社会がすべてをモノとして消費する『超消費社会』であるとすれば、『モノ・サピエンス化』への流れを拒んだり、またこれを阻止しようとしたとしても、まったく有効ではないだろう。現在の我々は資本主義ではない社会モデルをどこにも見つけることが出来ないからだ。その意味で、『モノ・サピエンス化』は歴史の必然と言えるのではないだろうか。この『モノ・サピエンス化』は他者からの強制でなく、むしろ個々人の自由な欲望をエネルギーにしている。だとすれば、『自由』を積極的に擁護する限り、『モノ・サピエンス化』への欲望を規制するよりは、逆にそれをより加速化させる方がよいのではないか。もはや、基本的方向として『欲望の加速化』しか選択肢はないのである。もちろん、批判する人々は存在する。しかし、『人間の尊厳に反する』という批判は、『超消費社会』に内包する多種多様な矛盾を隠いするだけなのである。『モノ・サピエンス化』への欲望を加速化させていけば、その内的な矛盾が自ずから明確になってくるのである。例を上げれば、人々が『自由』を追い求めれば、『平等性』が脅かされ、『格差』が拡大するだけでなく、社会的『規範』や『道徳』をも崩壊させ、さらには人々の『管理』が強化されることになるのである。これらの内的な矛盾は隠蔽するべきではなく、むしろ欲望の加速化によって出現させるべきなのだ。矛盾が明確化されたところで、何が生まれるかはわからない。だが、それを取り越えたところに新時代が開かれることは間違いない。『モノ・サピエンス化』への欲望を加速化させることで、我々が新時代へ突入するとすれば、それによつてはじめて、『モノ・サピエンスの尊厳』を擁護するべきなのかもしれない」

博士は私の本のエピローグを読み終えた。

「で、この計画に参加されて、今どんな感想を持たれているんです

か、岡本裕一朗教授」

博士は私にそう訊ねてきた。

第八章 超人類計画

「え？ サタン、今なんつった？」

岩崎文太は耳に手を当ててサタンに聞いた。

「超人類計画」

サタンに代わってルシファーが答えた。

「それがオバマたちが推進している極秘計画の名だ」

サタンが付け加える。

「それって要するに何だ？」

岩崎はぴんとこない。

「遺伝子操作やら、クローン人間やら、色々手広くやってるみたいだぜ」

ルシファーがまるでどこかの企業の事業展開を説明するように言った。

「な、なに！？」

岩崎は驚愕した。信じられなかった。

「そんな馬鹿なことがあるのか？」

「それがあるんだなあ、これが」

ルシファーがやけににやついている。

「何が目的なんだ？」

「だから言ってるだろ、超人類。人類を超えることを目指してるんだ」

「遺伝子をいじくったり、クローン人間を作って、人類を超えるだ
と？」

岩崎の両の拳がわなわなと震えてきた。それは怒りの震えであつた。

「ふざけるな！ 人間がそんなことをしていいわけがない！」

「俺は別にふざけてないぜ、文ちゃん」

ルシファーがやれやれと両肩をすくめた。

「いったい何様のつもりなんだ！ 神にでもなったつもりか！」

「そうそう、まったく文ちゃんの言うとおり。人間如きが、俺らの真似など、ちゃんちゃらおかしいね。創造は創造主たちだけの特権事項・専権事項なのだ」

「岩崎、怒りを感じるか？」

サタンが訊ねた。

「ああ！ 俺は今、猛烈に怒っている！ これまでに類を見ない、人間の尊厳の冒涇を前にしてな！」

「そうか。それなら、頼まれてくれるかな？」

サタンが透明な瞳を岩崎に向けた。

「俺に何して欲しいんだ？」

逆に岩崎は問い返す。

「超人類計画が行われている米軍基地への攻撃し、計画を破壊するのだ」

「いいぜ。どこに行けばいい？」

サタンは在日米軍基地の名を告げた。

「本当か！？ あいつら、日本で計画を実行しているのか！？」

サタンが頷く。

「自国で行うのは、なにかと都合が悪かったのだろうか」

「ますますふざけやがって！ 日本を何だと思ってやがる！」

「日本？ アメ公の腰巾着で属国or植民地だろ？」

岩崎がルシファーを鋭く睨みつけた。

「おいおい。俺なんかそんなに不味いこと言ったか？ マジになんなよ、文ちゃん」

ルシファーが岩崎の肩に手を乗せた。岩崎はにべもなくそれを振り払う。

「サタン様、文ちゃんが超おかんむりみたいなんですけど。マジこわ」

「いつ出発すればいい？」

気を取り直した岩崎がサタンに問うた。

「今すぐにも行ってくれ」

「俺とサタン様で全面的にバックアップしてやつから、安心しろよ、文ちゃん」

岩崎はルシファーを無視して、サタンに言った。

「サタン、俺を飛ばしてくれ」

「わかった」

「あ、ちょっと待った」

ルシファーが待ったをかけた。岩崎がんだとルシファー見つめる。ルシファーが書類を岩崎に手渡した。

「こいつとこいつ。田中俊介に岡本裕一郎。計画の責任者とアドバイザーだ。こいつらの個人情報が入ったファイルだ。必要だろ？こいつらは今も基地に詰めてるはずだ」

岩崎はサタンに視線を送る。サタンが魔力を発動し、岩崎は姿を消した。

「人間潰しには人間。さすがはサタン様、考えることが違いますね」
ルシファアがにこやかに告げる。

「人は所詮、どこまで行っても人でしかありえない。知能指数が少し上がったところで、それが何になるというのだ？ 兎戯にもほどがある。そしてその兎戯にさえ、腹が立つ。奴らは少しばかり知恵が回る猿のままでいいのだ。身の程を忘れたと言っなら、何度でも教えてやるっ」

サタンが憎々しげに言い放った。

「あいつらはおままごとが大好きなんですよ。でも、俺らはそれをぶち壊すのが大好きなんだ」

ルシファアが愉快そうに大笑した。

第九章 米軍基地襲撃

岩崎は某在日米軍基地のゲート前に立っていた。歩哨の米兵が数名いる。

「おいサタン、武器を送ってくれ」

「ほいきた、文ちゃん」

サタンではなく、ルシファーが返事を寄こす。

「お前に言ってない。いいから早く武器をくれ」

岩崎は冷たく突き放す。

「そう言っなよ、文ちゃん。俺とお前の仲だろう？」

「どついつ仲だよ。お前とは親しくもないだろが。そんなのいいから、武器くれって」

「オーケーオーケー」

岩崎の手に武器が送られてきた。それは黒い棒状のものであった。

「なんだこりゃあ？ エクスカリバーはどうした？ 木刀は？」

「それはさ、魔界の特殊な物質でできた代物で、死なない程度に人を痛めつけることができる一品なのだ」

ルシファーが説明した。

「こんなので大丈夫なのか？」

「文ちゃん、前に『俺は人を殺し過ぎてしまった』とか感傷的に言ってたよな。だからだよ。もう人殺しは嫌だろ？」

「それはそうだが」

「いけよ。お前が人類の誤った道を正すんだ」

ルシファーが攻撃を促した。

「わかった。行つてやるよ」

岩崎は歩哨の兵に走っていった。

「ヘイ！ フリーズ！」

岩崎に気がついた歩哨のひとりが、警告を発してきた。

「ノーセンキュー！ オールライト！」

岩崎は適当な英語を話して、兵に近付いていく。

米兵の銃が火を噴いた。しかし、岩崎には当たらない。サタンとの契約で魔人になった岩崎には、常人を圧倒する身体能力が備わっているからだ。米兵が放った銃弾が止まって見えた。マトリックスそのものである。

岩崎は米兵の胸を棒で鋭く突いた。米兵が地面に転がった。その喉をさらに突いた。米兵は気絶した。

他の米兵も撃ってきた。岩崎はよけながら、走り寄る。二人目は股間を逆袈裟がけに叩いた。米兵は痛みのあまり、地に伏し、悶絶する。

「コードレッド！ コードレッド！」

警備所に詰めた米兵がイヤホンに話しかけている。岩崎はそいつの首筋を打った。うめき声を上げ、米兵は崩れ落ちた。

「田中よ、緊急事態が発生した」

イエスが田中に急を知らせた。

「何が起こったというのです？」

「奴らだ。悪魔どもが我々の崇高な計画を潰しにかかってきたのだ」

「なんと！」

田中は目を剥いた。

「奴らは魔人岩崎文太を襲撃者として送り込んできた」

「岩崎文太！ あの大量殺戮テロリストが！ それは大変な事態で

はありませんか！」

「そうだ。だが案じることはない。なにしろ、我々はこの日のために撃退策を練ってきたのだからな」

「ですな！ 我々には彼らがいます！ アメリカ民主党が誇るヒーローたちが！」

「田中博士、先程から何を独り言をおっしゃっているのです？」

岡本が不審げに言った。眉を曇らせている。

「岡本教授、あなたには今まで黙っていましたが、もうこの期に及んで隠しだては抜きにしましょう。宜しいですね、イエス様？」

「うむ。よからう。教授に真実を教えてやるといい」

「イエス様から許しは得ました。実は教授、私は神や天使、イエスの声が聞こえるのですよ」

岡本は口をあんどぐり開けた。

「何をおっしゃっているのです？」

「教授、誤解しないでいただきたいのは、私は決して統合失調症などではないということです」

「しかし、私には何も聞こえませんか？」

「それは教授が神を信じない、不心得者だからなのです。私のよう

に信仰心篤い者にしか、神や天使、イエス様は話しかけられないのですよ！」

田中は満面の笑みを見せた。岡本には、それが不気味なものに映った。

第十章 呼称問題

次々わらわらと自動小銃をもった警備兵が沸き出てきた。警備兵たちはとにかく撃ちまくってくる。岩崎はよけながら、黒い棒で叩き伏せて行く。

主に喉や胸、腹を突き、股間を逆袈裟がけに打った。米兵たちが続けざまに地面に転がっていく。みな、うめき声を上げ、苦しがつている。

岩崎は米兵たちを置いて、走り出す。

「どこへ行けばいい？」

「とにかく今は走ることだな、文ちゃん。じきに研究所にたどり着く。そのまま走り続ける」

ルシファーが指示を飛ばす。

「わかった」

「それより文ちゃん、その黒棒、使えるだろ？」

「黒棒？ これのことか？」

「ああ、そうそう、黒棒。かなり使えるだろ？ それ、俺が作ってやったんだぜ？ 感謝しろ」

「はいはい、ありがとな」

「文ちゃん、素直でいいな。いつも素直になってくれると、なおのこといいぜ」

「ルシファー、いい加減、文ちゃんてのやめてくれないか？」

「え、なんで？」

ルシファーは素っ頓狂な声を出した。意味がわからないらしい。

「嫌なんだよ。お前、俺のこと馬鹿にしてんのか」

「いやいや、そんなことない。文ちゃんてのは、親しみをこめて呼んでるんだよ。誤解しないでくれよな」

「普通に名前で呼んでくれていい」

「じゃあ、岩ちゃんで」

「何が岩ちゃんだよ。だから、ちゃんづけやめろよ。ちゃんづけから離れるよ」

「じゃあ、岩つちで」

「岩つちって何だよ」

岩崎は苛立ち始めていた。

「岩つちも駄目かあ。困るよ岩つち。わがままな奴だな」

ルシファアの声はとても困っているようには聞こえなかった。

「もういい。好きなように呼んでくれ」

「了解、文ちゃん。お、どうやら、研究所についたようだな」

岩崎は研究所と呼ばれる施設の前にいた。見張りの警備兵が岩崎に気がつき、撃ってきた。岩崎は右に走り、左に走り、銃弾をさけながら、徐々に警備兵に接近、間合いに入るや否や、喉を突いた。警備兵は喉元を押さえながら、昏倒した。

岩崎は建物の中に入った。

「田中、侵入者はこの研究所に入ったようだ」

「来ましたか。しかし、奴はここまで果たして辿りつけるかどうか」

田中は余裕の笑みを浮かべてさえた。

「それはない。我々にはヒーローがついている」

「教授、岩崎がここに侵入しました。しかし、御心配には及びません。既に手は打っておりますから」

「岩崎と言うと、あの岩崎文太ですか？」

岡本は怪訝な表情である。

「ええ、そうですよ。それが何か？」

田中はこいつは何を言っているのだと言うような顔をした。

[illegible]

「死者が蘇るはずがありません。岩崎は自殺していなかったということなのでしょう。私が考えるに、真相はこうです。警察権力と結託した民自党が岩崎を死んだことにした。そもそも、あの大量殺戮テロ事件は警察と民自党が仕組んだことだった。違いますか？」

「全然違いますよ。岩崎はほんとに死んだんです。もつとも、自殺じゃなかったらしいですけどね。まあ、信じたくないのでしたら、それでよいでしょう」

第十一章 今、ヒトは遙かなる高みへのぼる

岩崎が研究所の仲に一步足を踏み入れた途端、巨大スクリーンが眼前を覆った。

「！」

岩崎は驚きを隠しきれない。

「ハロー、岩崎文太くん。私は田中俊介博士。超人類計画の責任者であると同時に、強力な推進者でもある」

スクリーンに白衣を着た中年男が映し出されていた。

「お前が田中俊介か。下らん計画を即刻中止しろ。さもないと」

「さもないと何だね？ 私を殺す？ はっ、そんなことは、不可能だ」

「殺しはしない。だが、何発かぶん殴ってやらねえと、気が済まん」

「おお、それは怖い怖い。恐ろしいことだ。凶暴な右翼テロリストが、たかが何発か殴ったくらいでおさまるわけないからな。殴り殺されるのは目に見えている」

「俺はもう殺しはやらない。こりごりなんだ」

「おやおや、随分と大人しいことだ。ここに来るまでに何か心境の変化でもあったらしい。教授、あなたも岩崎クンと話しますか？」

岡本は面食らっていた。またも田中がひとりごとを始めたからだ。私に岩崎文太と話せというが、そんな男はこの部屋にはいないじゃないか。何を言っているんだ、この男は。とうとう気でも狂ったのか。

「どうやって話すんです？ 岩崎は故人のはずでしょう？」

「あれ？ 教授にはこの大きなスクリーンが見えないんですか？ それはしょうがない。では、私が岩崎の言葉を伝えますから、教授はお好きなように喋って下さい」

「しかし」

「さあ」

田中に促され、仕方なしに私も話すことにした。

「岩崎文太さん、あなたは自殺を偽装した卑怯なテロリストに他なりません。今また、あなたは間違いを犯そうとしている。罪を重ねようとしている。愚かしい。非常に愚かしいことです。こんなことは、もうやめるんです。テロでは何も解決しません。暴力は怒りや悲しみ、復讐、暴力の応酬を生むだけです。破壊では誰も救えないのです」

「岡本先生、俺が許せないのは、人間にはやってはならないことがある、決して触れてはいけない部分というものがあると考えているからなんだ。人は神じゃない。人間だ。勝手に遺伝子をいじったり、クローン人間を作ったりしていいはずがない。そんなのは、思い上がった傲慢な人間がすることだ。俺は人間の尊厳が犯されるのを、黙って見ていることはできない。それだけだ」

「親が生まれてくる子供の遺伝子を、自分が自分の遺伝子をいじって、何が悪いでしょうか。クローン人間も作りい人が作るだけのことです。自由主義社会では、犯罪や迷惑行為以外は広く認められるべきなのです。自分の自由な自己決定によって犯罪と迷惑行為以外は何をしてもいいはずなのです。あなたは世界の理解に関して、根本に置いて、間違っています」

「俺が間違ってるだと？ ふざけるな。間違っているのは、お前らの方だ」

「まったく呆れ果てたよ、岩崎クン。君は大量殺戮テロリストの分際で、身の程もわきまえず、人間の尊厳などと大層高尚な理想を説くとはね。だが、しかし、そんなもの、そもそも初めから存在したのかなあ」

田中が深い陰影を帯びた冷笑を浮かべた。それは岩崎を戦慄させるのに十分だった。

「なんだと？ あるに決まってるだろ」

「岩崎さん、人間の尊厳など、極めて曖昧で漠然とした概念に他なりません。あなたはそんなものに基づいて私たちを批判しますが、

私たちとしては、なぜあなたが怒っているのか、どうしてこのよう
な行動に出るのか、理解に苦しみます。私たちは、さらなる自由の
邁進のために動いているだけなのです」

「教授、こんな男に高説を垂れても、何の効果もありはしませんよ」

田中がふつと鼻で笑った。

「田中さん……」

岡本も田中のあまりの冷笑的態度に困惑しているようだった。

「わかるかね、岩崎クン。今、ヒトは遥かなる高みにのぼろうとしているのだよ。人が人を超え、人であることを自らの意思で決断し、さらなる高みへと昇華しようとしているのだよ。今まさにね。それを君は邪魔しようとしてい。まったく馬鹿な男だよ、君は。人は超人となり、私はそれを成し遂げた天才科学者として、世界史に、人類の歴史に一頁を刻むことになるのだ。ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

田中が狂ったように笑い転げた。

第十二章 議論に負けても間違ってねえ

「それがお前の野望なのか、田中！」

岩崎が厳しく質した。

「ああ、そうだ。私は自分の生きた証をこの世に残したい。それこそが、そのみが、私の望み。言ってみればこの計画は手段に過ぎないと言えないこともないな」

田中は冷笑を浮かべ続けていた。

「貴様！」

突如として、もうひとつ巨大スクリーンが現れた。

「私にも話をさせてくれないかね、岩崎さん」

スーツ姿のバラク・オバマである。

「大統領！？」

田中と岩崎が同時にうめいた。

「岩崎さん、この超人類計画は、何より必要なプランなのです。人類は今、行き詰まっている。それは資本主義経済の行き詰まりとも呼べます。テロ、戦争、凶悪犯罪、貧困、飢餓……。世界中に苦しんでいる人々がいる。私はアメリカ合衆国の大統領であるとともに、この世界の指導者でもある。地球人類の指導者だと自覚

しています」

「それと遺伝子操作やクローン人間と何の関係がある！」

岩崎は相手が大統領でもひるまなかった。

「おおありです。これらの悲劇を打開するために、高い知能を持った人間の助けが必要なのです。私はそう判断を下した」

「それが人間の尊厳を侵害することになってモカ！」

「そうです。岡本教授の著書にもあったが、試験管ベイビーも当初は批判されたが、今となつては反対する者はいません。人間の尊厳とは、その程度のもなのです。最初は反対する者もいるでしょうが、いずれは、遺伝子操作もクローン人間も人類は容認するでしょう。というより、容認するしかないのだと私は考えています」

「何を！」

岩崎はまったく承知できなかった。

「岩崎さん、私もこの計画の話を聞いた時は、正直戸惑いを覚えましたが、反対でした。国家が秘密裏に実験をするようで、何やら陰謀に加担しているような考えを覚えたからです」

岡本が口を挟んできた。

「しかし、最終的には、田中博士の熱弁に負けました。これは避けでは通れない道なのだと、逃げてはいけないのだと、自分を納得させました」

「何言つてんだオッサン！ 自分が何をやっているのか、本当にわかってるのか！」

「わかっていないのは、あなたの方です、岩崎さん」

岡本も譲らない。

「現実を直視してください。現実から逃げないで下さい。あなたはただ、自分勝手な、自分でしか通用しない、あるべき理想の人間像を作り上げ、それに固執しているだけなのですよ。人間の尊厳？ あなたは何度も口にしましたが、何度でも言います、そんな曖昧漠然としたものは、存在しません。あるとしたら、それはそれを信じる人々の間にだけあるのです。それをまず理解して下さい」

「な、なんだと！」

さすがの岩崎も顔色が変わった。

「そうではないですか。あなたは自分の思想が規範だと、常識だと道徳だと思い込んでいるのです。そして、それからはみ出たとされるものを批判非難し、自分の理想とする型に無理やりはめこんで、管理しようとするのです。あなたはただ、人々を自分の思想に無理やり合わせ、自分の都合のいいように、管理したいだけなのです。あなたは人間を管理することが大好きな非常に古臭い考えに取りつかれた人間に他なりません」

「お、おま、お前」

岩崎はあまりの言われように言葉が続かない。

「違うと言つのですか？ 何も違わないと思いますが」

岡本は岩崎と異なり、表情に変化はなかった。

「どうやら勝負あつたようだね、岩崎クン」

勝ち誇つたように田中が言った。その顔には勝者の笑みが刻まれていた。

「く、くそっ！」

岩崎が悔しげに顔を歪ませた。

「そもそも、アメリカの大統領や大学教授と議論で勝とうと思うのが甘いのだよ、岩崎クン。さあ、負け犬はとっとと退場したまえ」

「待てよ」

「何だね？ まだ何かあるのかね？」

「確かに俺は議論は得意じゃない。それは認める。しかし、その超人類計画というのを、黙って見過ごすことはできない」

「君はおかしなことを言うね。自分の行為の正当性が担保されないにもかかわらず、これ以上テロ行為を続けると言つのか？ 呆れる。あきれ果てるよ、君」

「うつせえ。俺は間違つてない。間違っているのは、お前の方だ。今からそっちに行つてやるから、そこで待つとけ」

そう言い捨て、岩崎は駆け出していった。

第十三章 ティム・ロビンスとの対決

岩崎は長い長い廊下を駆けた。すると、前方に立ち塞がる者があった。

「あなたが岩崎文太さんか。大統領から話は聞いてるよ」

大柄な中年の白人であった。

「お前は誰だ？」

「私はティム・ロビンス。俳優さ」

「聞いたことねえなあ」

「なんと？ 私を知らないなんて。あなたはいつたい今まで何をしていたんだ」

「知らないもんは知らないな」

「映画『ショーシャンクの空に』で主演したんだけど。これは名作として名高いよ。知らない？」

「知らない」

「では、『ザ・プレイヤー』はどうだ？これで賞もらったんだけど」
「それも知らん」

「ではでは、『ミスティック・リバー』は？　これでアカデミー賞助演男優賞を受賞したんだよ」

「悪いが、知らん。俺は映画は見ないんだ」

「なんとということだろう？　この世に、映画を見ない人間がいるなんて。信じられない」

ティム・ロビンスは天を仰ぎ、大きくため息を吐いた。

「俺は急いでいる。そこをどいてくれないか」

「言つたろ？　聞いてなかったのか。私は大統領からあなたをここから先には通すなと言われている」

「俺と戦うつてのか？」

「ああ、そうとも。私はリベラル派の俳優として知られていてね。今度の計画にも大賛成なんだよ」

「なにを！　あんな計画のどこがいいんだ！」

「遺伝子操作する自由、クローン人間を作る自由が認められるべきだと僕は考えている。やりたい人が自分の自由意思でやるのを、どうして反対するんだい、岩崎さん。私はそこがわからないよ」

「人間には侵してはならない聖域があるんだ！」

「聖域ねえ。それって、誰が決めたの？」

「誰？　そ、それはだな」

岩崎はさっきまでの威勢はどこへやら、口ごもってしまった。

「どこからどこまでが聖域かどうかは岩崎さん、あなたが決めるわけ？　あなた、何様？」

「お、俺が決めるわけじゃない」

「じゃあ、誰が決めるんだ？　神か？」

「神とか言っわけじゃない」

「じゃあ誰が決めるの？」

「みんなだ、みんなが決めるんだ」

「みんな、ねえ。でも、そのみんなには私は入ってないよね？」

「それはそうだが」

「岩崎さんはみんなが遺伝子操作・クローン人間反対していると思ってるんだ？」

「そ、そうだ。俺はみんなを代表していると思う。………たぶん」

「たぶん？」

「もうやめた」

「何をやるんだ？」

ティムは不思議そうな顔をした。

「みんなとかはもうどうでもいい。俺は人間の尊厳が侵害されるのが許せない。他人の意見なんて、関係ない」

「岩崎さん、あなたは遺伝子操作やクローン人間が人間の尊厳を侵害すると言っけど、あなたは遺伝子操作する自由やクローン人間を作る自由を侵害してるんだ。あなたは他人の自由を侵害する加害者なんだよ。それをきちんと認識しているのかい？」

「俺が自由を侵害してるだと！ ふざけんな！俺はそんな自由は認めない！」

「だから、あなたは何様のつもりなんだよ？ 何の権利が、資格があつて、他者の自由を侵害するんだ？」

「俺には難しいことはわからない。だが、なんとなく、遺伝子操作やクローン人間は人が人としてやってはいけないような気がするんだ！」

「随分と歯切れが悪いじゃないか？ 自分でそうは思わない？」

「思わん！俺は俺が正しいと思う道を進むだけだ！」

「参ったよ。僕は暴力は嫌いだね。あなたをここで説得できればいいと思っただけど、話がまるで通じないみたいだ。行きなよ」

ティムは岩崎に道を開けるように脇へのいた。

「いいのか？」

「いいとも。正しいと思う道を進めばいい。僕はあなたが正しいとは思わないけどね」

岩崎は歩を進めた。

第十四章 スカーレット・ヨハンソンとの対決

岩崎が前へ前へと走っていると、女がひとり立っているのが見て取れた。

「待ってたわよ、岩崎文太」

女が挑発的な眼差しを向けてきた。

「お前は誰だ？ まさかお前、女優じゃないだろうな？」

「当たり前。私はスカーレット・ヨハンソン。ハリウッド女優よ」

「悪い。聞いたことない」

今回も聞き覚えがない岩崎であった。

「『ロスト・イン・トランスレーション』って聞いたことない？
受賞作なんだけど」

「悪いが、聞いたことないな」

「私を知らないなんて、岩崎って何時代の人？ 今何歳？」

「一応、二十歳だが？」

「二十歳！ 本当に？」

「本当だよ」

「それなのに、私を知らない？」

「ああ。それが何か？」

「ちょっとシヨック」

「・・・・・・・・」

しばし両者の間は沈黙した。

「スカーレット、そこをどいてくれないか。俺、先を急いでるんだ」
沈黙を先に破ったのは岩崎だった。

「それはできない相談ね。私は大統領から、あなたをここで足止めしろ、可能なら倒せと依頼されてるの」

「あんまり女とは戦いたくないんだ」

「それって女性差別じゃないの？ 女性を弱者だとみなす傾向から出てくる発想よね」

「確かにそうかもしれない。しかし、それが何だよ」

「あなたは古いタイプの人間なのよ。なんか、そう思ったら猛烈に敵意がわいてきたわ」

スカーレットが床を蹴り、岩崎の股間目掛けて蹴りを繰り返して出てきた。岩崎は何とかそれを回避した。

「なかなかやるわね！ でも！」

スカーレットは次々に蹴りを放ってきた。そのたびに岩崎は的確にさけた。

「あら、ミスター岩崎、こっちは素手なのに、あなたは武器を所持しているのね。それって卑怯じゃないの？」

スカーレットが黒棒を見つめて言ってきた。確かにそうだと思い、岩崎は黒棒を捨てた。

「はあああああああああああああああ！」

スカーレットはパンチも繰り出してきた。パンチ、蹴り、パンチ、蹴りと交互に攻撃を仕掛け、岩崎を休ませない。

岩崎は防戦一方である。岩崎は女とはあまり戦いたくないという思いから、攻撃できずにいたのだった。

見かねてルシファーが言った。

「おい、文ちゃん、さっきから何やってんだよ。こんな女、さくつとぶちのろして、先に進めよ。何考えてんだお前」

「言っただろう。俺は女とは戦いたくない。あまり」

「何今更かつこつけてんだ、お前。お前は大量殺人者じゃねえか。今になってかつこつけても全然かつこつかないぜ？」

ルシファアは下品な声をたててゲラゲラ笑った。

「……………」

「じゃあお前は、超人類計画阻止を諦めるのか」

「そうじゃない」

「なら、今すぐこの女倒せよ。わかったな」

「誰と話してるの、岩崎」

スカーレットが不審に思い、聞いた。

「ルシファア。魔界の副王」

「悪魔ね。あなたのような悪魔の手先なんかに、負けるわけにはいかないのよ。自由を守るのが、私の使命！ はあああああああああああああ！」

スカーレットが気合を入れて岩崎の顔に蹴りを放った。

「！」

岩崎は片手でそれを受け止めて見せた。

「わりい」

岩崎はスカーレットの腹に拳を突き立てた。

「ぐほっ！」

スカーレットは前のめりになって倒れた。岩崎は倒れこむスカーレットを尻目に、先へ進んだ。

第十五章 ジョージ・クルーニーとの対決

岩崎が走り続けると、スーツ姿の男の姿が目に入ってきた。と、男の手が動き、何か飛んできた。

岩崎はとっさに体を左に舵を切った。物体が壁に激突、穴が開いた。

「いきなり何しやる！」

岩崎は敵意こもった視線を向けた。

「これは失礼。今のは挨拶代わりだよ」

「お、お前は!？」

あまり映画スターに縁がない岩崎でも、今度は見知った顔であった。スーツの男はジョージ・クルーニーだった。

「私もリベラル派で、民主党支持者なんだよ。自由を死守するため、君をここから先は一步も通すわけにはいかない。とおっ！」

ジョージの腕が動き、また物体を飛ばしてきた。岩崎は今度は右へよけた。

いったい何を投げているんだと思い、物体を手にとって岩崎がよく見て見るとそれはどうやら鉄でできていて、何やら英語で書かれている。

「鉄で作られた法律辞典さ」

「どうしてこんな武器を使うんだ？」

「わからないか？」

「わからんな」

「私はね、以前『フィクサー』という映画で、弁護士役を演じたことがあるんだよ。そして私はその映画でアカデミー主演男優賞にノミネートされた。だがしかし」

突然、ジョージが顔を俯いた。その顔は徐々に凄みを増し、暗い陰影を帯び始めた。

「私は受賞をのがしてしまったんだ！ これは悪魔による陰謀に違いない！ 名実ともに一流俳優である私が、受賞しないなんて、裏があるに決まっているのだ！ お前ら悪魔や魔人の魔力によって、私はオスカーを手に入れられなかったのだ。それからずっと悪魔への復讐に燃えていた。そして、今日大統領によってその機会が与えられたのだ！ 岩崎！ まずは悪魔の手下であるお前からだ！ とあつ！」

また法律辞典が飛来してきた。岩崎は回避しながら、ジョージとの間合いを詰めていく。

「俺は関係ないだろ」

「黙れ！ お前も一枚噛んでいるんだろう！ 私にはわかる！ 私をなめるな！ 甘く見るな！」

岩崎が間合いに入っと思ったとき、これまで以上の数の法律辞典が飛んできた。

「くっ！」

岩崎は後退を余儀なくされた。それしか道はなかった。

「ふははははははははははははははははは！ どうだ、私の投擲術は！ 私はこの日のため、鉄製法律辞典飛ばしを修行してきたのだ！ つけ焼き刃の技ではないのだよ！ お前はこの法律辞典に頭をぶつけて死ぬのだ！ 私のオスカーの邪魔をした罰だ！ 死ぬ、岩崎文太！」

ジョージの投擲術はまさに神業と言ってよかった。恐るべき技術であつた。

「おい文ちゃん、何やってんだよ。さつさとこの弁護士気取りを倒して前進してくれよな。見ているこつちとしては、全然面白くないぜ」

ルシファーが呆れ気味に言ってきた。

「なら、お前が直接やればいいだろ」

「嫌だね。こんなのは、下っ端がやることだ。何でそんな仕事、副王たる俺様がやらなきゃならねえんだ？ 冗談は容姿だけにしてくれよな、文ちゃん」

「せめてアドバイスはないのか？」

「アドバイスときたか。……そうだな。黒棒を使え。黒棒で法律辞典をたき落としながら、進むんだ。そうすりゃ、きつと勝てるぜ」

「その手があつたか」

「お前頭悪いんだよ、文ちゃん。やっぱり右翼って知能低いのがなんのかねえ」

岩崎は黒棒で襲い来る法律辞典を叩き落しながら、走った。

「な！ 馬鹿な！ 私の神的投擲術が利かないだと！ そんなことが！」

ジョージは顔を青く変色させていった。

「何が自由を守るだ！ 遺伝子操作する自由やクローン人間を作る自由なんて、俺は認めない！ おおおおおおおおおおおおお！」

岩崎は飛翔し、ジョージの頭を打った。ジョージは悲鳴を上げることもなく、昏倒した。

岩崎はそのまま走り去っていった。

第十六章 ダニー・グローヴァーとの対決

岩崎が走り進んでいくと、長身の黒人が行く手を遮った。初老の男のようである。

「待ってたぜ、岩崎文太」

岩崎はこの男にも見おぼえがあった。

「お前は確か……」

喉にまで名前が出かかっているのに、出てこない。

「駄目だ。わからん」

岩崎は降参した。

「俺がわからないとは、お前さん、相当なハリウッドスター音痴だな」

男がにこやかな笑みを浮かべた。それは見る者を安心させる、とても健やかなものだった。

「私はダニー・グローヴァーだ」

その名を聞いた途端、岩崎の目が輝いた。

「ああ！ そうだそうだ、そうだった。ダニー・グローヴァー」

「ここから先へは通さん。祖国の未来、人類の未来のため、自由を守るため、超人類計画を頓挫させるわけにはいかなんだよ」

「遺伝子操作やクローン人間を作って、どんな未来が待っているって言うんだ！」

ダニーは不思議そうな顔をした。まるで岩崎の言っていることがまったくわからないとでもいうかのように。

「想像できんか？ 素晴らしい未来だよ。高度な知能をもった人間が多数生まれ、この地球が抱える問題をその優秀な頭脳を用いて、解決していく。私が思い描いているのは、そういう未来だ。あんたのは違うのか、岩崎？」

「違うな。全く違う」

「なら、教えてくれよ」

「人間の尊厳を侵害した未来なんて、ろくなもんじゃない」

「具体的にはどうなると思ってるんだ？」

「そ、それは……」

岩崎はまたしても口ごもってしまった。

「言えないのか？ あんたは、人にろくに説明もできない癖に、こうして破壊活動を行っているというわけか。……はあ。ほとほと呆れかえるよ」

ダニーは大きさに首を横に振り、肩をすくめて見せた。

「黙れ！ 俺は間違つてない！ 俺は誰が何と言おうと、人間の尊厳を守るため、断固として戦い抜く！ 行くぞー！」

岩崎は駆け出した。

「おおっと、来ない方がいいぜ」

ダニーはショットガンを手にしていた。

「！」

ショットガンが銃声とともに火を噴いた。岩崎は弾道を読み、回避に成功していた。

「俺をなめるなよ、岩崎。俺はリーサル・ウエポンだ。プレデターと戦った男だ。そんな奴を相手に、あんたはどんな手で戦おうって言うんだ？」

「映画の中の話じゃねえか」

「映画を馬鹿にするもんじゃない。俺は刑事以上に刑事のつもりだ。凶悪宇宙人を倒した俺に、あんた如きテロリスト一匹が敵うわけないぜ。悪いことは言わない、今来た道を帰って家でおねんねしてな」

「言ってくれるじゃないか、爺さん」

「まだ年寄り扱いするのは早いぜ、若いの。で、あんたの得物、それ、なんだ？」

ダニーは岩崎の武器に興味津津である。

「黒棒だ」

「黒棒？ そのまんまじゃないか。それはなんなんだ？」

「魔界の物質でできていて、人を死なない程度に痛めつけられる武器だ」

「なるほど、なるほど。そいつは魔界生まれの魔界育ちで、人を死なない程度に痛めつけられる武器か。題して黒棒。……てめえ！ 人を馬鹿にしてんのか！」

ダニーは再びショットガンを撃った。岩崎は右へ飛び、回避した。

「おいおいおいおい、文ちゃん、年寄り相手に何苦戦してんだよ。見てらんないぜ」

ルシファーが話しかけてきた。

「見りゃわかるだろ。相手はショットガンをもってる。間合いに入り込めない。苦戦して当然だ」

「文ちゃん、お前はほんとに頭がわりいな。黒棒を投げつけてやりやいいんだよ」

「黒棒を投げるだど？」

「ああそうさ。なんてことないだろ。喉にでも狙って投げたれ」

岩崎はやり投げのように、ダニーの喉元目掛けて黒棒を投げつけた。

黒棒がダニーの喉元に吸い込まれていく。

黒棒は正確にダニーの喉を突いた。ダニーは大きく後ろへ倒れ込んだ。

岩崎が走り去ろうとすると、ダニーの声が聞こえてきた。

「……………はあ、はあ……………き、利いたぜ、若いのが、ここから先は私よりもっと強い猛者が控えている。どこまで行けるかな」

「俺は止める。絶対に止めて見せる！」

「そうか」

ダニーはもう何も言わなかった。

第十七章 アレック・ボールドウィンとの対決

岩崎が走っていると、スーツ姿の肥満体男が現れた。

例によって岩崎に見覚えはなかった。

「お前もやはり、ハリウッドスターなのか？」

臆することなく岩崎は聞いてみた。

「もちろん。私はアレック・ボールドウィン、ムービースターだ。そしてハリウッド有数のリベラル派でもある。ミスター岩崎、あなたは魔人らしいが、それは本当か？」

今度はアレックが問ってきた。

「ああ、なりゆきでそうなった」

「なりゆき？ なりゆきね。そうか、なりゆきね。……この魔人野郎！」

突然アレックが猛然と岩崎に向かって走り寄ってきた。岩崎は会話に集中していたこともあり、突然のことで、回避することができなかった。

岩崎は巨漢のアレックのタックルを受け、無様に尻もちをついた。

「痛いじゃないか。この、クソデブ！」

岩崎は駄目もとで抗議した。

「痛い？ この程度で、何を言うんだ？ 私はもっともっと、多大な苦痛を受けているんだ！ ミスター岩崎、今、デブと言ったかね？」

「ああ、言ったよ。それが何だ？」

岩崎が立ちあがりながら答えた。

「確かに私はデブだ。しかし、若い頃からデブだったわけではない。ほら、これを見てくれ」

アレックは懷から何やら取り出し、岩崎に手渡した。岩崎がしげしげと覗き込むと、それは、アレックが若かりし頃の写真だった。なるほどスマートな体型をしている。

「痩せてるな」

正直な岩崎の感想だった。

「ああ、そうだ。昔は痩せてた。しかし、私は中年になって、急激に体重が増え始めたのだ！ なぜだがわかるか？」

「知らん」

「それは、悪魔によるリベラル派の私に対する嫌がらせだったのだ！ 私を醜く肥え太らせ、私を大いに苦しめる陰謀だったのだよ！ 私はそれを神や天使やイエスの声によって知ったのだ！」

アレックは唾を飛ばして力説した。鬼気迫る形相をしていて、岩崎は恐ろしかった。

「お前ら悪魔は、私を太らせるだけでは飽き足らず、私が司会を務めた第82回アカデミー賞授賞式からの帰路、私が乗ったリムジンに追突事故を起こさせたのだ！ それだけではない！ フリー百科辞典ウィキペディアの日本版の私の項目を見る！ こんなことが書いてある！ 『90年代半ばまで主演級スターだったが、現在は脇役に回ることが多く、体重もかなり増えている』。なんたる言い草だ！ 人をこけにしやがって！ 私を何だと思ってるんだ！」

「いや、それって事実じゃないのか？」

岩崎はあくまで冷静だった。

「……認めたくはないが、確かにそうかもしれない」

拍子抜けするほどアレックは興奮が収まったようだった。

「いや、かもしれないじゃなく、そうだろう？」

岩崎は心底呆れていた。

「事実だとしても、それはすべて悪魔が企んだ陰謀のなせる業なのだ！」

アレックはまた沸騰してきた。

「都合の悪いことは、みんな悪魔の陰謀なのか？」

岩崎は苦笑しつつも、聞いてみた。

「そうだ！　そうに違いない！　他の誰が騙せても、この私は騙されない！」

「そりゃあ、大した自信だな。びつくりするよ」

「私が主役から脇役に回る羽目になったのも、オスカーがとれなかったのも、キム・ベISINGERと離婚したのも、デブったのも、追突事故も、すべてなにもかも、悪魔の陰謀なのだ！　わかる！　私にはわかるんだ！　そして貴様だ、岩崎文太！」

「俺がどうしたんだよ？」

唐突に自分の名が呼ばれたので、岩崎はやや驚いた。

「悪魔が倒せないというのなら、その手先たる貴様を血祭りにあげてやる！」

「俺は関係ないだろ」

「うるさい！　黙れこの魔人！」

アレックはまたしても突進してきた。しかし、同じ手を何度も食らう岩崎ではない。軽やかに右へ避けると同時に、アレックの足に右足をひつけてやった。

「おわっ！」

アレックは見事にずっこけ、顔を床にぶつけた。

「うっ……き、貴様！」

アレックは鼻血を垂らしながら、岩崎を鋭く睨みつけた。

岩崎は動じることなく、素早く動き、アレックの首筋を黒棒で打った。

「う！」

アレックは気絶した。

「デブの体当たりには気をつけないとな」

そう言い残し、岩崎はその場を後にした。

第十八章 スーザン・サランドンとの対決

岩崎が走っていると、一人の女の姿が目に入ってきた。もう老人と言える年頃の白人女である。

と、女の腕が動いた。何か物体が飛来してきた。

岩崎はとつさに左に舵を切り、回避した。

「御挨拶だな、婆さん」

「私の投げ技から逃れるとは、なかなかやるね。ここまで辿り着いたことだけはある。ほめてあげるわよ」

女は余裕綽々の態度である。

「婆さん、あんたはなにもんだ？」

「私はスーザン・サランドン。オスカー女優よ」

「それは凄いな。で、あんたも遺伝子操作・クローン人間推進派というわけか？」

「当然よ。遺伝子操作しようが、クローン人間作ろうが、個人の自由じゃない。特定の個人のみが許されるなら問題だけど、すべての人に平等にその権利が与えられるのなら、何も問題はないはず。やりたい人がやるだけの話なのに、どうしてそれにあなたは反対するの、岩崎さん？ 私には理解できないわね」

「俺はただ、人が人である限り、守らなきゃならないところがある、その一線を守りたい、それだけだ」

「人間の尊厳を守る、というわけね」

「ああ、そうだ」

「あなたは何、もしかして、進化論を否定するの？ 神が人間を作ったとか信じてる人？」

「まさか。俺は猿から人間が進化したと信じてるよ。俺は宗教家じゃない」

「進化論を肯定するのに、人がさらなる進化を遂げようとするのは、反対し、阻止しようとするわけね。それってどこか矛盾してるんじゃないの？」

「矛盾なんかしてないさ。仮にしてみても、俺には関係ない。矛盾してても、俺は人の尊厳を守る」

「頑固なのね」

「ああ。悪いが、ここを通してもらっ」

「それは出来ない相談だわ。通りたくば、私を倒しなさい」

「婆さん相手に戦いたくない」

「さっきからあなた、失礼ね。私は確かにもう年だけど、その婆さんとかいうの、よしてくれる？」

「悪かった。スーザンさん、そこをどいてくれ」

「ごめんだわ。いくら頼まれてもね。第一、私は悪魔には恨みがあるの」

「恨み？」

「私は去年、夫のティム・ロビンズと別れたの。それはきっと悪魔の陰謀なのよ。人権問題に熱心に活動している私に打撃を加えようとしたのよ」

「あんたも悪魔の陰謀論者か」

「悪魔は実在しているわ。私はそう神や天使やイエスから聞かされたわ」

「あんたは宗教家なのか？」

「違うわよ。でも、聞こえるものはしょうがないじゃない。存在しているものを、否定することはできないわ」

「ああそう」

「私と彼を別れさせた恨み、今ここで晴らさせてもらっわよ」

スーザンの腕が再び動き出した。また何か飛んできた。岩崎は右へよけ、ちらりとその物体を見た。

「こりゃあ、また本じゃねえか」

「そうよ。超合金でできた法律辞典なの」

「また法律辞典か」

「私は『依頼人』という映画で弁護士役を演じていたのよ」

「知らないし、そんなの俺見てないぜ」

「あらそう。映画に興味ないなんて、変わった人ね」

「別に俺は変じゃない」

「どう見ても、スキンヘッドのジャパニーズネオナチにしか見えな
いけど」

「だ、黙れ！」

岩崎は確かにスキンヘッドであった。しかし、そこを言及される
のが嫌이었다。なぜかは当人にもよくわからなかった。

「お喋りは終わり。さあ、ゲームの時間よ」

スーザンの腕が生き物のようにめぐるしく動き、次々と超合金
の法律辞典が投げつけられた。

岩崎はそれを叩き落していくが、スーザンのスピードについてい
くのがやっとだった。これでは、とても攻撃どころではない。

「おいおい、文ちゃん、また危機に陥ってるな」

「そう思つなら、助けたらどうだ」

「いいぜ？ 助けて下さいませとちゃんと言つたらな」

「……ふう。わかった、言うよ。助けてくださいませ」

「了解。ほれ」

もう一本黒棒が現れた。岩崎は二刀流の使い手となった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお！」

襲い来る法律辞典を順に叩き落としながら、岩崎はスーザンに迫つていった。

「二本ももつなんて卑怯じゃないの！」

スーザンが非難の言葉を口にした。

「これも人が人であることを守るため、だあ！」

岩崎はスーザンの両脇腹を突いた。

「ごふっ！」

スーザンはうめき声を上げ、ひざまづいた。

「人権派の私が敗れるなんて……。アメリカが、世界が、終わってしまうわ……。」「

「俺が終わらせはしない」

岩崎はそう言つと、走り出した。

第十九章 ブルース・ウィリスとの対決

岩崎はカッターシャツにジーンパンという格好のいでたちの男を遠目から捉えた。

と、その男の腕が動くのを認め、岩崎は床に伏せた。

銃声とともに銃弾放たれ、岩崎の頭をかすめた。

岩崎は右に左によけながら、男との間合いを詰めた。

「お、お前は！？」

今度はさすがの岩崎も見知った男であった。アクション俳優、ブルース・ウィリスである。

「そうか兄さん、俺のことは知っててくれたか。ありがとよ。あんな、なんか映画俳優に疎いみたいだったから、俺も知らないかと思っていたよ」

「いや、さすがの俺もお前は知っていた。しかし、なぜここに？」

「おやおや、失礼な話だね。俺がここにいちゃあ、悪いのか？」

逆にブルースが訊ねた。

「いや、イメージとギャップがあるなと」

「それはよく言われる。なぜか俺は、共和党支持者だと思われてい

るんだ。困ったもんだよ、まったく。俺は民主党支持のリベラリストなのにな」

「お前も遺伝子操作・クローン人間に賛成なのか！」

「当たり前だぜ、ジャパニーズボーイ。それに、それらはあくまで手段に過ぎないことを忘れるな。目的は、地球人類を破滅から救うことにあるんだ。そこんことをわかってんのかよ、あんたは」

「俺は認めない。間違った手段を用いれば、自ずから結果も間違ったものとなる！」

「そうか。そうだな、たとえば悪いが、いわばこれは実験なんだ。壮大な実験何だよ。政府が絡んだ、それも大がかりの。誰かが最初の一步を踏み出さねば、前へは進めない。それを俺たちはやろうというんだよ」

「とにかくお前らは間違っている」

「今のままだと、地球も人類も滅んじまうんだぜ？ それを指加えて見ていると？ はっ、笑わせるぜ。俺はそんなの、まっぴらごめんだね。遺伝子操作やクローン人間で優秀な人間を作り出し、彼らからお知恵を拝借する。その何が悪い？ むしろいい考えだと思うが」

「俺は思わん！ 断固として反対する！ そして絶対に止めて見せる！」

「そうか。それなら、もう俺たちで話すことはないな」

ブルースは二丁拳銃を構えた。

「俺は今まで何度も地球を、人類を救ってきた。ダイハードシリーズではテロリストから市民を守り、アルマゲドンでは自ら自爆して地球を救い、フィッフスエレメントでも地球を救い、サロゲートでも人類を救い、まあとにかく、何度も地球人類を救ってきた。今度もそうさ」

ブルースが撃ってきた。岩崎は弾道を読み、廊下を走り回る。

「だからそれは全部、映画の中での話だろ」

「わかつちやいないな、日本人、嘘は真となる、そして、俺はヒーローを演じなければならぬ。地球の危機を救ってこそ、ブルース・ウィリスなんだよ。それができなきゃ、俺はただの映画俳優になっちまう。そんなことは、嫌だね」

ブルースの拳銃は火を噴き続けた。岩崎はよけきれぬ場合は、黒棒で弾丸を受け止めた。

「やるじゃないか。そうか、これは駄目か。それなら、これはどうだ」

ブルースはカバーを外すと、機関銃が現れた。

「これは映画『ジャッカル』で使った奴の本物バージョンだ。これは効くぜ、かなり」

ブルースがスイッチを押し、機関銃が唸り声を上げた。

岩崎は駆けた。岩崎が居た場所に弾丸が命中し、壁は破壊され、大きな穴があいた。

「日本の右翼かなんだか知らないが、俺はテロリストに負けたことはないんだよ。消えろ、クソったれのテロ野郎！」

ブルースは岩崎に照準を合わせ、弾丸を撃ち続けた。

岩崎は二本の黒棒を巧みに操り、弾丸を受け止めつつ、前進した。

「そんな芸当がいつまで続くかな」

機関銃の発射音は凄まじかった。

岩崎は間合いに達し、床を蹴って飛んだ。着地と同時に、ブルースの胸を突く。

「ぐおほはっ！」

ブルースが二三メートル吹き飛ばされた。

「ば、馬鹿な、スーパーヒーローのこの俺が。幾度も地球を救ってきたこの俺が。こんなハゲに倒されるなんて」

「ハゲは余計だ、ヒーロー気取りが」

岩崎はブルースの頭を二本の黒棒で打った。ブルースは崩れ落ち、床に転がった。

第二十章 スティーヴン・セガールとの対決

岩崎の前を、これまた見知った男が立ち塞がった。

「お前は、スティーヴン・セガール！」

相次ぐアクションスターの登場に岩崎は驚愕しきりであった。

「ここを守る人間は、俺で最後だ。つまりは、俺を倒せば、お前は
この研究所の最深部へ到達できるというわけだ。だが、それはあり
えない」

「お前もリベラリストなのか？」

「まあな。アクションばっかやってると、保守派だと勝手にレッテ
ルを貼る奴も出てくるが、俺は違う。それより、お前はよくここま
でたどりたけたな。それはほめてやる。あのウィリスを倒したんだ
からな。全人類の英雄を倒すとは、なかなかできないことだ」

「だから、映画の中での話だろ。あいつもお前ももうオッサンで、
そろそろアクション引退する年齢じゃないのか？」

岩崎は呆れ気味で言った。

「勝手に人を年寄り扱いするなよな。俺は、俺たちはまだまだやれ
る。それを今実践して見せてやる。来いよ」

スティーヴンが手招きする。

「余裕だな、オッサン」

「なめるな。誰が呼んだか知らないが、俺はB級アクション映画の帝王と呼ばれているんだ」

「そうなのか」

「そうらしい。小耳で挟んだ」

「いい加減な話だな」

「いいから来いよ」

「じゃあ、行くぜ」

岩崎が駆け出そうとすると、スティーヴンが制止した。

「おい坊主、俺はこの通り丸腰なのに、お前は棒を二本も持つてるじゃないか。不公平だとか、卑怯とは思わないのか。フェアに行こうぜ、フェアに」

「それもそうだな」

岩崎は素直に黒棒を捨てた。

「おい文ちゃん、何やってんだよ。こいつのいいなりになんかなくて馬鹿じゃねえの勝ちやいいんだよ、勝ちや」

見かねたルシファーが即座に突っ込みを入れた。

「そういう問題じゃない」

岩崎は取り合わない。

「馬鹿正直も大概にしてくれよな」

呆れているのは岩崎だけではないらしい。ルシファーも岩崎に呆れているようだった。

「男の男の勝負だ」

そつい言つと、岩崎は走り出した。

ステイーヴンは合掌するように両手を合わせている。

「お祈りの時間か？」

岩崎が茶々を入れる。

「まあ、そんなところだ」

岩崎がステイーヴンの顔面目掛けて拳を繰り出した。すると、ステイーヴンは凄まじいスピードでそれをさばき、岩崎を取り押さえた。

「いてててててててててててて！」

腕をひねられた岩崎が悲鳴を上げる。

「まるでなつてないな、坊主」

スティーヴンが岩崎を解放する。

「この！」

岩崎がスティーヴンの顔を狙い、蹴りを放った。それをスティーヴンはやすやすと受け止め、一歩進み、恐ろしい早さで岩崎の首、胸、腹に拳を叩きこんだ。

「じふっ！」

岩崎はその場にうずくまった。

「これで終わりか、坊主？ 大したことなかったな。お前はまるでだめだ。俺にとっちゃ、お子様だな。さて、とどめといくか」

スティーヴンが岩崎の首筋に手刀を叩きこもうとした瞬間、岩崎の体は目にもとまらぬ速さで移動した。

「なんだと！？」

予想外の事態に、スティーヴンは目を白黒させた。

岩崎はすぐにサタンかルシファー、それか両者が自分の体を操ったのだと直感した。

「ルシファー、何をする？ これは男と男の戦いだと言っただろ？」

「そんなことは知らないねえ。俺様たちとしては、お前に負けてもらうては困るんだよ、文ちゃん」

「その通りだ、岩崎。もうお前には任せておけない。見てられん。この体、しばし借りるぞ」

サタンはそう告げた。岩崎の体がまたスティーヴンの目から消えた。

「どこだ？ どこに行った？」

「ここですよ、オサーン」

背後で岩崎の声がした。振り向く間もなく、スティーヴンの後頭に強力な一撃が加えられた。黒棒で思い切り殴りつけたのだ。

スティーヴンは声を上げることができずに、床に転がった。

「何て奴らだ」

岩崎は憑依状態から解放されると、サタンとルシファーに抗議した。

「勝ったからいいじゃんか。何怒ってんの、文ちゃん。さあ、最深部へ進み、超人類計画を破壊するのだ。行けよ」

岩崎は仕方なく、走り、最深部へ通じる扉の前に立った。そして扉を開けた。

第二十一章 超人類、そして神々の怒り

岩崎は我が目を疑った。そこには、予想外の事態が岩崎を待ち構えていたからだ。

「おぎゃあ、おぎゃあ」

鳴り響くのは、赤ん坊声、声、声。まるで産婦人科である。

「やあ、やっと会えたね、岩崎くん。私が田中俊介だ。こちらが岡本教授」

田中が余裕たつぷりに自分と岡本を紹介した。

「おや、なにやら動揺しているようだね。どうしたのかな？」

「何がどうなってる？」

「見ての通りさ。もう超人類の子供たちは誕生していたのだよ」

「なんだって？」

岩崎は今度は我が耳を疑った。

「ここまで来てくれたわけだから、せっかくだから、私がじきじきに説明してあげよう。まず、全米で知能指数が高い男女をそれぞれ百名に精子と卵子の提供をアメリカ政府が極秘裏に依頼した。体外受精した受精卵から、病気や障害をもって生まれそうなものは排除し、健康なもののみを残し、そのうえで、さらに遺伝子操作を行い、

知能や運動能力等の能力を強化した。成人時にはIQ三百、四百、五百、いやもつと上、IQ千の人間が生まれたかもしれないのだよ。運動神経も抜群だ。この星の将来を託すのに、これ以上の逸材がいるだろうか？ ええ、どうだ、岩崎くん？」

田中はこれ以上ないほどの満面の笑みを浮かべ、言った。

「・・・・・・・・」

岩崎はあまりの事態に言葉もない。

「黙ってしまったか。まあ、無理もないがね」

「おいおい、文ちゃん、何ぼーとつつ立てるんだよ。さっさとその赤ん坊どもをぶっ殺せ」

「な、なんだと？」

岩崎はルシファアの言葉に心底驚いていた。

「俺に子供を殺せだつて？ この赤ん坊たちを？」

「ああそつだ、百人の赤ん坊を全員ぶっ殺せ。殺しはお手の物だろ？」

「断る」

断固たる口調で岩崎は言い放った。

「断る？ 今断るって言ったのか、文ちゃん？」

「ああそうだ、誰が赤ん坊を殺すもんか」

「おいおいどうしたんだよ、文ちゃん、お前は遺伝子操作には反対だっただろう？ 超人類計画を破壊するんじゃないのかよ？」

「赤ん坊には罪がない」

「何言ってるんだ、こいつらの存在自体が罪さ。自然の摂理に反している。こいつらは、俺たちがせつかく作った世界の根幹を破壊する存在なんだよ。いいからさっさと皆殺しにするんだ」

「断る。俺は絶対やらない」

「……そうか。そうだな、お前はそういう奴だった。そういう人間だった。忘れてたよ。じゃあもう、お前には頼らない。これより『魔王陛下の怒りの鉄槌作戦』はプランBに移行する」

「な！？ ルシファー、それはいったいどういうことだ！？」

「あん？ お前にもう関係ないこつた。ここからは、こいつにご登場願おうか。出番だぜ、ジョージ」

岩崎、田中、岡本の眼前に巨大スクリーンが現れた。画面には、黒のワイシャツと黒のズボンを履いた男が立っていた。アメリカ合衆国前大統領、ジョージ・W・ブッシュだった。

「今晚は、諸君。全人類の良心、ジョージ・W・ブッシュだ。私は神より、あるおぞましき計画を聞かされた。本当に身の毛のよだつ話だった。遺伝子をいじくるなど、神への、自然への、人類への、

冒険以外の何物でもない。私は全力をあげて、その邪悪な計画を阻止することにした。米軍内の共和党勢力に密かに働きかけ、計画が行われている研究所を核ミサイルで攻撃することにしたのだ。既に発射ボタンは押されてしまった。ものの数分で、その研究所は跡形もなく消滅するだろう。そして、人類という種は守られるのだ」

「ここを核攻撃？ 正気か、ブツシュ！」

田中が完全にアワを食っている。

「君はいつぞやの遺伝子工学の博士だったね。私はユーモアやジョークが大好きな人間だが、残念ながら、これはユーモアでもジョークでもない。厳然たる事実だ」

「だ、大統領、お聞きになりましたか！」

今度はオバマが映ったスクリーンが現れた。

「今、ルシファーから知った。大変なことをしてくれたな、ブツシュ！」

普段冷静なオバマとは思えないほど、激昂しているようだった。

「怒っているのか、バラク？ しかし、神々や私の怒りはもつと凄まじいものだ。私はこの作戦を『神々の怒りの鉄槌作戦』と名付けたくらいだ。これは新たなバベルの塔の倒壊なのだよ。諸君ら思い上がりきった傲慢な人間どもに、神々と神々を信仰する者たちとともに協力し、怒りの鉄槌を下すのだ」

「基地内の米兵や周辺住民の日本人の生命はどうするつもりだ！」

「言っただろう？　これは神々の怒りなのだ。そして作戦の結果伴う犠牲は、必要な犠牲なのだよ」

ブッシュは極めて冷静な口調で言い切った。

最終章 俺が子供たちと日本を守る！

「大統領、大至急核ミサイルを対処して下さい！」

田中が悲鳴に近い声を出している。

「無論だ」

オバマは関係機関に電話をかけた。

「今発射された核ミサイルの自爆スイッチを押せ。緊急だ。……
・何、作動しないだど!? もう一度だ、もう一度試してみろ」

「無駄だよバラク、神に人間が敵うわけがない」

ブッシュが断言した。

「貴様は黙ってろ」

苛立ったオバマは舌打ちした。

「私だ。パトリオットで……。基地に向かっている核ミサイルを迎撃しろ。緊急だ。……。何！ パトリオットが無人偵察機によって破壊されただど！ それは本当か！ 全部！ すべて破壊されただど！」

「オバマ、俺たちの力をなめるんじゃないよ、無人偵察機なんか力antonに操れらあ。悪魔なめんなよ。いやあしかし、愉快愉快。米軍の兵器で米軍を攻撃する。何とも皮肉な展開だよな」

ルシファアがふざけた調子で言った。

「イージス艦だ！ 付近に展開しているイージス艦で迎撃しろ！
・
・
・
動かないだと！？」

オバマは頭を抱えてしまった。

「バラク、何をやろうとしても無駄だ。これは神の怒りなのだから、絶対だ。神は絶対的な力をもっているのだよ。そして私は神の代理人だ。私は神の啓示を受け、神の代わりに神の怒りを実行する者なのだ。私は誤った道へ進もうとしている人類を正したいだけなのだ。私は神の使い、使徒だ」

ブッシュが確信して言う。

「こんなことをすれば、アメリカの信頼は失墜し、国際的に孤立し、国家の威信は地に落ちることになる。お前は狂ってる、ブッシュ！」

オバマが目を剥いて抗議した。

「日本の置かれた状況を見る、バラク。ロシア、中国、韓国、北朝鮮との関係は良好とは言えない。歴史認識・領土問題を抱えているからだ。日本はアメリカなしにはやっていけない国なのだ。今度のこととて、事故として処理すればすむ話だろう？」

ブッシュは自信満々である。

「こいつも単純馬鹿だぜ。日米関係は決定的に悪化し、日米同盟は破られ、米軍は撤退させられる。結果、アメリカは極東に置いて影

響力を低下させることになる。そんなこともわからんらしいぜ。けけけけ、宗教右翼を騙すのは楽チン楽チン」

ルシファーは心底楽しそうであつた。

「ちつくしょう！ 私の子供たちが！ 私の研究の成果が、すべて消えてしまう！ 誰か！ 誰でもいい！ 何とかしてくれ！」

田中は半狂乱になったようだった。

「俺が。俺が何とかする」

岩崎が断固たる口調で言った。

「なに文ちゃん、俺らを裏切んの？」

「神に背くというのか、日本人よ？」

ルシファーとブッシュが同時に聞いてきた。

「俺はこの子たちと日本を守る！」

「かつこいいねえ。でもそんなことできやしないぜ？」

「やってみなければわからない」

「遺伝子操作で生まれた異端の子らをお前は守るといつのか？」

ブッシュは岩崎の決断が理解できない。

「遺伝子操作で生まれようが、人間は人間だ。俺は大勢の人間の命を殺めたが、子供を殺したことはない。……。いるんだろ、天使でも！ 俺に力を貸してくれ！」

「お前が何をしてくれると言っただ、岩崎文太」

天使の声が聞こえてきた。

「俺が核ミサイルを止める！」

「どうやって？」

「それを教えてくれ！ お前らだつて人間よりももっと凄い能力もつてんだろ！ 何とかできるはずだ！」

「・・・手動で自爆スイッチを作動させることができるかもしれない。だが」

「だが何だ？」

「そのときの爆発に巻き込まれて、お前も無事ではすまないぞ？」

「俺のことなんかどうなったっていい！ 早く、核ミサイルの所へ連れて行ってくれ！」

「わかった」

岩崎は姿を消した。

「き、消えた！ なぜこんなことが・・・」

岡本はびっくり仰天である。

岩崎は核ミサイルにつかまっていた。物凄い突風が岩崎を襲う。

「おおおおおおおおおお！ どれだ！ どこにスイッチがある！」

「お前の体を借りるぞ」

岩崎の拳がミサイルを打つ。ミサイルの外壁に穴があげられた。

岩崎はもう一度、拳を放った。

核ミサイルは爆発した。岩崎は爆風で吹き飛ばされた。

「大統領、該当ミサイルが自爆しました！」

部下がオバマに報告した。

「……………岩崎文太、やってくれたか」

オバマは深いため息をもらした。

「ジョージ、聞いての通りだ、核攻撃は失敗に終わった」

ルシファアがブツシュに告げた。

「なんと！ これでは科学の暴走を食い止めることができません！」

今一度お力をお貸してください、神よ！」

「ああ、考えとく」

ルシファーは至って適当に返答した。

「田中、ここは救われたぞ」

天使ミカエルが田中に説明した。

「そうですか！ まさか、岩崎に救われるとは……………」

田中は複雑な顔を覗かせた。

岡本はさらに複雑な表情を見せていた。岩崎文太とは、何者なのか。今の岡本はその考えのみに囚われていた。

サタンとルシファーはその様子をスクリーンで見っていた。

「あーあ、文ちゃんにやられたよ」

ルシファーは残念そうである。

「これでいい」

サタンが力強く言った。

「どこがいいんだよ、俺ら的にはパッドエンドじゃねえの？」

「いや。俺は岩崎の活躍が見られただけで、満足だ。人間ドラマを見る事ができて、至福の時を過ごせた」

「そついつもんかね」

ルシファーは不満げであった。

岩崎文太の活躍で、在日米軍基地への核攻撃は阻止された。

遺伝操作で誕生した子供たちは密かに養育されたという。

その後の岩崎の足取りを知る者はいない。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7130n/>

『今、ヒトは遥かなる高みへのぼる』

2010年10月26日14時53分発行